様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２５ 日現在

機関番号：１０１０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６６３５

研究課題名（和文）近現代フランス習慣論の美学的射程―「創造」と「飽き」

研究課題名（英文）Aesthetic scope of modern and contemporary theories of habitude:The creation and the boredom

研究代表者
春木　有亮（HARUKI, Tomoaki）

北見工業大学・工学部・准教授

研究者番号：８０４６９５３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究ではまず、近現代フランス哲学史上の習慣概念を、感性という枠組みから読みなおし、それが、「創造」概念といかにかかわるかをさぐった。習慣論の「経験論的転回」とともに、不変性たる習慣から、可変性たる習慣へと習慣概念の含意が移り変わるにつれ、習慣が創造とかかわるにいたる。そのとき「飽き」は、創造の受動性という両義的な役割をになう。すなわち、古（旧）いものの忌避の感情でありながら、いわば内側からの更新を果たす。そうした「飽き」を「身体図式の組み替え」にさいしての「疎外感」とメルロ＝ポンティは言い、河本英夫は「総合的感性」と呼んだ。

研究成果の概要（英文）：First of all,in our research we examined closely modern and contemporary theories of habitude and analysed the notion of habitude.Then we tried to see how the notion of habitude is concerned with the notion of creation.We found that the habitude connected to the creation as the implication of the notion of habitude turned from the stability to the changeability with the empiricist turn of the theories of habitude.Then we found also that the boredom has the ambivalent function of passiveness of the creation.The boredom is the emotion of avoiding the familiarized things as well as the renewal from inside.The boredom like this is what Merleau-ponty calls "the sense of alienation” in "the rearrangement of body schema", and what Hideo KAWAMOTO explains the “synthetic sensibility”.

研究分野：美学・芸術学

キーワード：美学　芸術　感性　フランス　習慣　飽き　哲学

１．研究開始当初の背景

代表者は、エチエンヌ・スーリオ（Étienne Souriau 1892-1979）の専門研究をとおして、芸術制作論を考察してきた。スーリオは、感性の発展形としての理性、「アイステーシス理性raison esthétique」に基づいた合理主義的芸術論を展開する。ここでのアイステーシスは「知覚」を意味するが、そのとき知覚は、もっぱら主体の構成的な行為ではなく、現象学的な他者との遭遇である「感覚」を内に含みこむ。こうした逆説をはらむ芸術的な「知savoir」は、単なる「認識connaissance」ではなく、「習慣habitude」であるとスーリオは分析する。実践の知としての習慣概念は、近現代のフランス哲学が努めて論究したテーマの一つでもあった。その習慣論の系譜を美学の立場から論じることができないか、というのが着想のきっかけである。その試みに際し、本研究課題は、おもに二つの論点を据える。

(1)習慣と感性 習慣と創造

まず、近現代フランス哲学史上の習慣概念を、感性（感覚）の枠組みから読みなおし、それが、新たなものの産出という意味での「創造」概念といかにかかわるかをさぐる。国内外を問わず、習慣論の総合的、体系的な研究は少ない。唯一の網羅的な研究書はプラトンからフッサールまでの習慣概念を網羅したフンケ（G.Hunke）のGewohnheit（1958）であり、三輪正はそれを踏まえ、フランス近現代習慣論に特化した研究を残した（『習慣と理性』1993）。三輪は、フンケから示唆を得ながら、habitude だけではなく、「慣習」とも訳しうるcoutume、moeurs、manière といった語までを考慮し、モンテーニュの習慣論から筆を起こして、ベルクソン、サルトルまで、数人の近現代哲学者の習慣概念を論じている。その他、三宅中子の『習慣と懐疑』（1985）、および『習慣と秩序』（1996）、稲垣良典『習慣の哲学』（1981）は、哲学的習慣論の一枚の地図を与えてくれる。しかし、これらにおいては、哲学史を貫く習慣論というトピックそれ自体の豊かな可能性が検討し尽くされたとは言えない。本研究は、三輪が提示した習慣と「理性」という視点に対してオルタナティヴなコンテクストを提案したい。つまり、習慣論全体を「感性」という視点からとらえなおし、そのテーマ論としての可能性をさぐる。そしてその先に、三輪自身が示唆するにとどまった、習慣の可変性を論究し、人間がいかにして新たな価値を産み、自己創造をおこなうか、という、いわば「習慣と創造」というテーマを発展的に考察することができると考える。

(2)「飽き」という感性

第二に、上記の問題意識の中で形づくられる習慣と創造というテーマ系において、「飽き」の概念を抽出する。創造の契機を新しいものへの志向とみるならば、それは古（旧）いものの忌避と裏腹の関係にあると言える。そのじつ、習慣を論じる思想家はしばしば同時に、「倦怠ennui」や「嫌気dégoût」、「疲労fatigue」、「飽満rassasiement」といった、慣れに対する飽きと総称できるような感情や状態に言及する。習慣論ではこうした飽きの概念は、たいていの場合、ただ否定的な感情として考察されているが、本研究ではもう一つの習慣/創造論として、飽きを論究したい。スヴェンセン『退屈の小さな哲学』（1999）、小谷野『退屈論』(2007)、トゥーヒー『退屈』（2011）、國分『暇と退屈の倫理学』（2011）と、2000 年前後以降、哲学領域において退屈論が展開した。「飽き」は、そうした退屈論のなかで、退屈の一種として考察された。しかしたとえばスヴェンセンにおいては、「飽和の退屈」よりも、「実存の退屈」の方がより本質的であるとされ、飽和の概念そのものが深く論究されることはない。それに対して、河本『飽きる力』（2010）は、「飽き」を真正面から考察した初めての論考であると言え

る。河本は、自身のオートポイエーシス論を基礎にして、「飽き」感情の積極的、創造的な側面に光をあてる。河本によれば、飽きとは、飽きを習慣の再帰的更新とも言うべき事態であり、「総合的感性」である。河本の飽き論は、フランス近現代習慣論の最後尾に位置するメルロ＝ポンティ（1908-61）の習慣論を発展的に解釈した結果であると、本研究は見通す。

２．研究の目的

本研究は、近現代フランスの習慣論を、「感性」と「創造」という美学的コンテクストから読みなおし、そのテーマ論としての意義を拡大しつつ、「飽き」論の構築を試みる。まず、理性的主体の統御の道具である啓蒙主義的習慣から、実存的生のメカニズムとしての経験論的習慣へという従来の習慣概念史を、習慣の更新を通じての「（自己）創造」という切り口で発展的に論じる。そのうえで、新たな価値への志向の裏面ではたらく、古い(旧い)ものの忌避の感情である「飽き」の概念を創造の動因の一つとしてさぐりあて、いわばもう一つの習慣論を提示したい。

３．研究の方法

本研究は、まず習慣を論じるフランス思想家たちの著作を一次資料として収集したうえで、その精読を行い、ついでその内容を、研究目的に述べた三つの論点に添って分析する。精読、分析に際して必要、有用な情報が記載された文献は、二次資料として積極的に参照する。分析の結果を最終的に研究報告書、あるいは投稿論文のかたちでまとめる。

４．研究成果

本研究では、近現代フランス哲学史上の習慣概念を、感性という枠組みから読みなおし、それが、「創造」概念といかにかかわるかをさぐった。

まずは、近現代フランスの習慣論を理性-感性という二元的コンテクストにおいて理解する。そのさいに、習慣概念が、「理性（知性）」、「感性（感覚）」、「精神」、「身体」、「能動」、「受動」といった諸概念とどのように結びついてきたかを通時的な視点で眺め、いわば美学的習慣論の見取り図を準備した。習慣の発見は、たとえばモンテーニュ（1533-92）においては「習慣化された理性」という理性観とともにあり、懐疑論につながる。デカルト（1596-1650）はむしろ、理性的認識としての学問と習慣としての技術が対置するが、パスカル(1623-62)においては再び、モンテーニュを引き継ぐかたちで合理主義自体が習慣の所産とされる。やがて経験論を挟み、コンディヤック（1714-80）は感覚一元論の下、汎習慣主義とも言える人間観をうち出し、メーヌ・ド・ビラン（1766-1824）は、習慣の考察を通して、感覚に能動性を、思考に受動性を見出し、従来の二元論的区分に反省を促す。その路線は、ラヴェッソン（1813-1900）、ベルクソン（1859-1941）において深化し、習慣は心身が交感するための要石の働きを担うに至る。

ついで、心身を跨ぎ越える習慣概念を論じるという点で、メルロ=ポンティの習慣論を論究した。こうした習慣論の見取り図作成の過程で、習慣概念がつねに理性（知性）に対する感性の脅かし、あるいは牽制をはらんできた、ひいては理性と感性の交差の契機となってきたということが明らかになった。理性と感性の交差のなかで、いかにして習慣の更新が可能になるのか、その問いから、習慣による新しいものの生成、あるいは創造に説き及んだ。

さらに、習慣論史に見え隠れする「飽き」の概念の脈流をたどる。たとえば、デカルト、パスカル、メーヌ・ド・ビランは、習慣化に際する「倦怠」、「嫌気」を語る。とりわけメーヌ・ド・ビランは、感情の「外化」の理論を通じて、感情はその対象の不在によって強まるのであって、いったん対象を得てしま

えば表面上は消えるという飽きの情念論を展開する。また、ドゥルーズ（1925-95）は、時間論上いかに自己が構成されるかという議論のなかで、欲望の裏返しである「飽満」や「疲労」が自己を構成すると語る。

習慣論の「身体論的転回」とともに、不変性たる習慣から、可変性たる習慣へと習慣概念の含意が移り変わるにつれ、習慣が創造とかかわるにいたる。そのとき「飽き」は、創造の受動性という両義的な役割をになうことがわかった。

こうして各思想家の「飽き」論をたどり、さらに河本英夫の飽き論をメルロ＝ポンティの習慣論の枠内で解釈し、飽きが、習慣の裏面で、もう一つの習慣論を形成していることを明らかにした。

メルロ＝ポンティは、「習慣の獲得とは身体図式の組み替えであり更新である」と定義する。たほうで身体図式とは、わたしの身体の経験を、世界のなかでの経験たらしめているもの、すなわち「等価物の系」であって、世界内の位置に応じてわたしの身体のさまざまな運動任務をはじき出す、いわば変換システムである。習慣の獲得は身体図式の組み替えであるという命題は、変換を支える「不変式」である身体図式そのものの変換可能性の表現であると言える。「色が見られるようになるとは、視覚の或る様式、自己の身体の新しい使用法を獲得することであり、身体図式を豊かにし、再組織することである」と言われる意味で、画家は、通常は「揺るがしがたいものであると考える」習慣を「定かならぬものとする」ことによって、「つねに再開される実存」の叙情詩を編む。それは、たとえばある緑色の modulation(定訳は「転調」)、あるいは、事物のデフォルマシオンを通して、である。そのとき画家を動かすのは、「或る欠如」、「疎外感」であるとメルロ＝ポンティは言う。

たほうで、河本英夫（『飽きる力』（2010））によれば「飽き」とは、「経験の速度を遅らせ」て、「選択のための隙間を開くこと」であり、いままでのやりかたではいけないという身体からの勧告である。このとき飽きがもたらす選択は、「視点の切り替え」といった、包括的な立場からの、知性による選択ではない。飽きは、生成プロセスのさなかではたらき、目的に向かう「意図」や「意識」をつうじてではなく、「結果として何かを生み出す」「総合的感性」であると、河本は位置づける。さらに河本は、ピアジェの発達段階論において、「すでに実行できていた物とのかかわりに対して「飽きること」」を経たうえで、「物へのかかわりかたの変更が出現する」と指摘する。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

1.<u>春木有亮</u>「「恰好」から「かっこいい」へ――適合性 suitability の感性化」北見工業大学『人間科学研究』第 13 号　2017 年 3 月 pp.1-30（査読あり）

2.<u>春木有亮</u>「将来への帰還、過去への投企――エチエンヌ・スーリオの、創造する「ノスタルジー」」　北見工業大学『人間科学研究』第 12 号　2016 年 3 月 pp.49-66（査読あり）

〔学会発表〕（計 1 件）

1.<u>春木有亮</u>「「カッコイイとは、こういうこと」か―適合性 suitability の感性化」美学会　第 67 回全国大会　同志社大学　2016 年　10 月

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

○取得状況（計 0 件）

〔その他〕

なし

６．研究組織
(1)研究代表者

春木　有亮　　(Tomoaki HARUKI)
北見工業大学　工学部　准教授
研究者番号：80469535